科目ナンバリング	U-LAS00 20017 LJ34						
授業科目名<英訳>	宗教学各論I（死生学） Topics in Religious Studies I (Thanatology)			担当者所属職名・氏名	非常勤講師 竹内　綱史		
群	人文・社会科学科目群	分野(分類)	哲学・思想(各論)		使用言語	日本語	
旧群	A群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義（対面授業科目）
開講年度・開講期	2026・前期	曜時限	火1	配当学年	全回生	対象学生	全学向

[授業の概要・目的]

本講義では、宗教学との関連のなかで死生学の基礎を学ぶ。死生学は20世紀後半に生まれた新しい学問であり、学際的な分野であるが、本講義では特に宗教的世界観や宗教的実践との関わりのなかで、死と生についての考え方を扱う。

死生学には四つの柱がある。

① 死に臨む人々や死別の悲しみに直面している人々へのケアという問題（臨床死生学）。
② 死生に関わる儀礼や文化の問い直し。
③ 死生をめぐる根源的な感受性の涵養という問題（「いのちの教育」）。
④ 古今東西の死生観の比較研究。

このように、生命倫理や医療倫理の問題から文化的実践や教育の問題、そして世界中の多様な死生観についての比較と、死生学が扱う領域は多岐にわたるが、そのどれもが、伝統的な宗教的世界観や宗教的実践が現代において弱体化・無効化しつつあることがその学問的動機となっている。それは例えば、葬送儀礼（葬式）の前提となっている宗教的世界観がもはや明示的には信じられなくなっているにもかかわらず、葬送儀礼を一切やめることには抵抗を覚える人が多いという曖昧な現状のなかで、そもそも葬送儀礼とは何なのかを問い直すのが死生学の一つの役割だということである。

本講義では、上の四つの柱を念頭に置きつつ、具体的な問題を取り上げながら、死生学（と宗教学）の基礎を学ぶことにしたい。

[到達目標]

1. 死生学という学問の基礎を理解する。
2. 生と死をめぐる現代的諸問題を理解する。
3. 自分自身の死生観を育めるようになる。

[授業計画と内容]

宗教的世界観や宗教的実践との関わり深い死生学の諸問題について、以下の各テーマについて授業を行う予定である。ときどき授業中にミニレポートを書いてもらい、できる限りそれも講義に反映する予定。

1. イントロダクションと死生学の概要（第1回～第2回）
2. 震災による死者とその慰霊について（第3回～第5回）
3. 死の様態・死の人称・死の定義（第6回～第8回）
4. 「良い死」などというものがあるのか（第9回～第11回）
5. 死生観と人生の意味について（第12回～第14回）

フィードバック（第15回）については別途連絡する。

宗教学各論I（死生学）(2)へ続く↓↓↓

宗教学各論I（死生学）(2)

[履修要件]

特になし

[成績評価の方法・観点]

平常点（60点）と定期試験（40点）
平常点は、授業内容に関するミニレポートを数回に1回提出してもらい、それによって評価する。
定期試験は、授業内容に関するいくつかのテーマから一つ選んで論じてもらうことを予定している。

[教科書]

使用しない

[参考書等]

（参考書）
島薗進・竹内整一編『死生学1 死生学とは何か』（東京大学出版会、2008年）ISBN:9784130141215
宇都宮輝夫『生と死を考える　宗教学から見た死生学』（北海道大学出版会、2015年）ISBN:9784832933903
伊原木大祐・竹内綱史・古荘匡義編『宗教学』（昭和堂、2023年）ISBN:9784812222157
高橋原・堀江宗正『死者の力　津波被災地「霊的体験」の死生学』（岩波書店、2021年）ISBN:9784000614894
シェリー・ケーガン『「死」とは何か［完全翻訳版］』（文響社、2019年）ISBN:9784866511283
このほかにも授業中に適宜参考文献を挙げる。興味を持ったものには自分からどんどんあたってほしい。

[授業外学修（予習・復習）等]

予習としては、次回の授業のテーマに関係する問題について自分で考えたり調べたりすること。
授業後には、授業で紹介をしたいくつかの文献を読み、授業で説明したテーマの理解を深めること。

[その他（オフィスアワー等）]

死生学を学ぶことは、自分自身の人生を見直し、生と死について根本的に考えることを要求される。心して受講してほしい。
ミニレポートの提出やお知らせ・教員とのやりとりはLMSを用いる。

[主要授業科目（学部・学科名）]